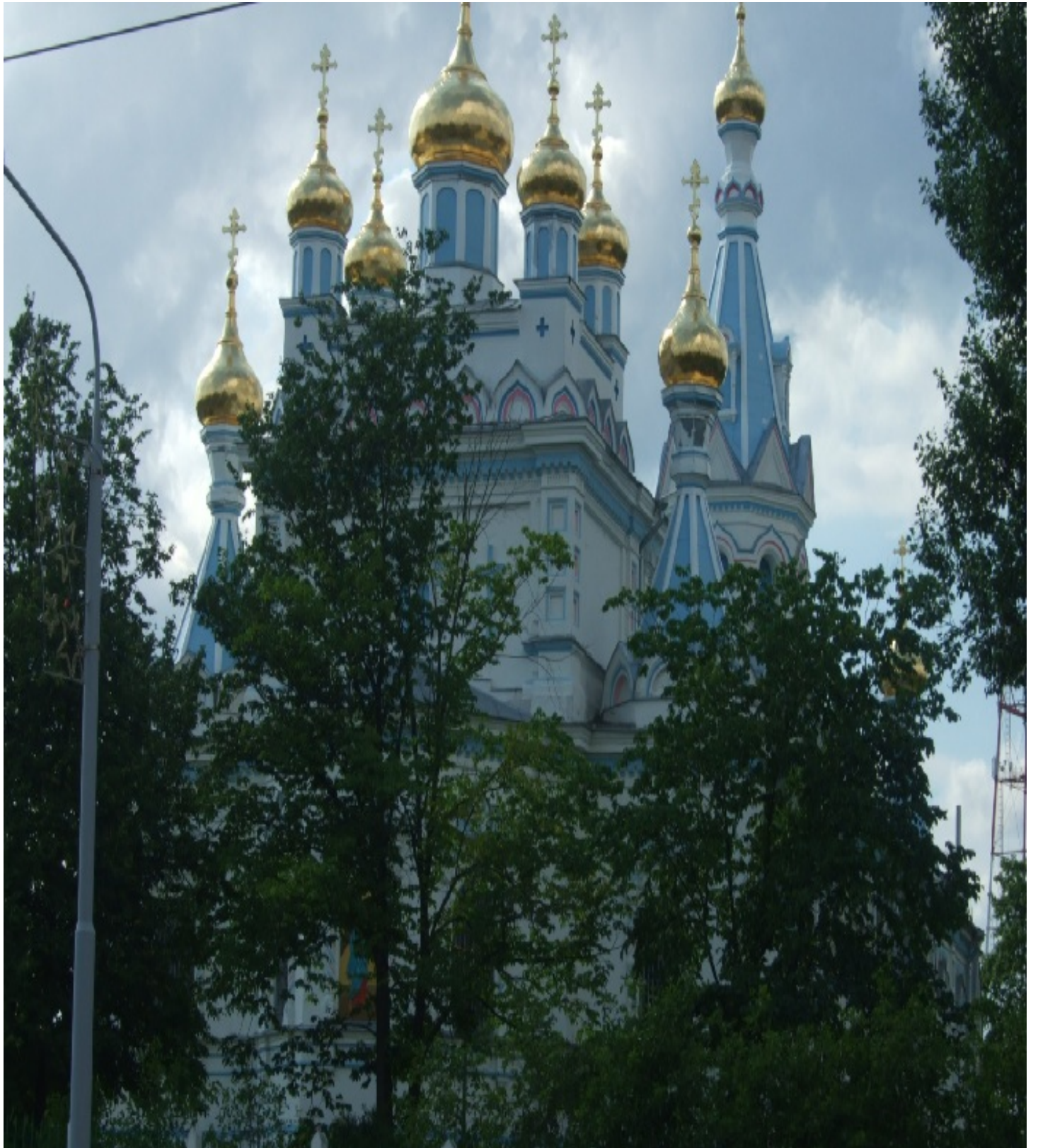


【8月16日】森川はるかレポート2 東ラトビア

(2010/08/16 月曜日 11:05:22 JST) - 投稿者 webmaster - 最終更新日 (2010/08/16 月曜日 11:20:42 JST)

森川はるかさんのレポート第2弾は東ラトビア訪問記です。ローカルな列車の旅、第二の都市・ラウガウビルスや緑と水の町で知られるレーゼクネの様子と、そこに住む人々の生活ぶりなどが興味深く描かれています。東ラトビアはガイドブックにも殆んど掲載されていません。それだけに若い日本女性一人旅の感性豊かなレポートとは、ラトビアに関心がある方々にとって必読と言える内容です。なお最後に森川さん撮影の写真アルバムを掲載していますので併せてお楽しみください。【latvija編集部】Esiet sveicin?ti Latgol? ! 東ラトビアを訪ねて? リトアニアのヴィリニユスからシベリア鉄道のような列車の中のほとんどはロシア人でした。「チケット見せて」と言う車掌さん、隣に来る乗客…そんなサントペテルブルグ行きの列車に一人スーツケースを抱えて乗り込み、ガタゴトと夕方の東ラトビアへと向かいました。ラトビア第二の都市ダウガウビルス。ここは58%の住民がロシア人で、ラトヴィア人は17%しかいません。ここではきつとロシア語の方が有用なのだろうと考えていましたが、ロシア語もラトヴィア語も1年弱しか勉強していない私にとっては少し不安でした。東ラトヴィアはガイドブックにも掲載されておらず、周囲で行ったことのある人がいないため、情報がない中で果たして大丈夫なのだろうかと車窓の夕暮れをただ一人眺めていました。2時間後ダウガウビルスに降りると、その駅自体に特に何も無い上、ここで乗降客がほとんどいないことに気がきました。駅を「くぐる」と車も人もいない街の通り。第二の都市なのにもあまりにも静かなので、反対に緊張がほぐれてしまいそうな気がしました。隣にいたタクシー運転手のおじさんに近づくと「このホテルかい?」と次々にホテルの名前を言い連ねるので、「いやいや、こっち」と慌ててゲストハウスの地図を見せました。それからタクシーに乗り込むとロシア語で「日本から来たのかい?」と聞くので、「その通り(大概中国人と間違えられるので正直驚きました)」とそっとロシア語で答えると、急にぱっと表情が明るくて「ロシア語が分かるのかい! 俺なんて英語は全然できないんだよね」と叫びました。「いや、ちょっとだけです」と首をすくめる私を無視して、まさにハイテンションと言わんばかりに両手を離しながら運転をし始め蛇行運転に。「見て、ほら、あれが駅だね?」この店、あそこで酒と食べ物をか買えるからね」「それからホテルで休んで」と大声で両手離し運転で街の解説をするので、何度もガコンガコンと車の壁にぶつかりそうになりました。ゲストハウスでも優しいロシア人のおばさんが出迎えてくれました。英語が予想以上に通じないということを咄嗟に気付いたので、ロシア語と「外国語としての」ラトヴィア語を交互に交えながら会話をすることになってしまいました! 「ここが食堂ね、8時でいいかしら?」と親切に話してくれるおばさんに緊張がほぐれる間もなく、タクシーのおじさんに「是非また俺を呼んでくれ!」とメモを残しながら何度も接吻されました。私が階段を上ると、「いやあ、あんなにちっちゃなお嬢ちゃん一人でこんなところに来るなんて大したもんだよね」とおばさんと大声で話しているのが聞こえてきて、「ちっちゃなお嬢ちゃん」という言葉に苦笑してしまいました。? 宿泊客も皆ロシア人で、街の人々も皆ほとんどロシア人でした。お店の表示などは全てラトヴィア語ですが(国語庁の政策上公の場は全てラトヴィア語になっています)、会話は全てロシア語。張り紙などもロシア語で、相手が誰であろうとロシア語で話しかけてきます。ラトヴィア語の新聞を手に入れることさえ難しく、お店に置いてあるものはほとんどロシア語新聞。若い人で時々英語が分かる人がいるかどうか危うい話かで、ラトヴィア語さえ聞かなくてよいという、不思議な街でした。中心地は都会的な建物があったり、ダウガウビルス大学はリーガにある建物よりもずつときれいで驚きましたが、一方中心地から離れるとまるで廃墟のような団地も見られます。第二の都市とはいえ、大きさの割に閑静です。また当然ながらロシア正教会が割合多いのですが、すぐ近くに大きなカトリック教会が建っているという、混在して並ぶ様はこの街の性質を表しているのかもかもしれません。バルト三国唯一ぼぼ手がつけられずに残存するダウガウビルス要塞が何よりも有名ですが、実は半分が一般人立ち入り禁止(軍事的領域かもしれない)で、半分はなんと住宅地になっています。教会やお店があるばかりではなくバスも運行されているほです、ここに住む人は旧ソ連の軍事関係者の家族だと言われています。ただ中には独特のこの空間を気に入って住み着く芸者もいるそうです。またこの都市はポーランドやリトアニア、モスクワと近いことから重要な運輸地点・有名な貨物駅でもあります。実際私が滞在していたゲストハウスは大きな貨物駅の目の前で、終日ロシア語で貨物の業務アナウンスが響いていました。だからこそラトヴィアにとって第二の都市として重要な位置になっているのかもかもしれません。ダウガウビルスは正直に言いますと、あまり観光向きではありません。ダウガウビルス要塞は半分生活環境ですし、他でも特に見どころがあるわけでもありません。また私が行った7月初旬はカラカラの猛暑だったこともあってあまり外出せず、ゲストハウスの一人部屋でテレビを専ら見る生活。普段全くテレビを見ない私ですが、ここでは延々と夢中になってテレビを見ていました。何故ならこれほどダウガウビルスでの生活の一面を見る材料として、興味深いものはなかったからです! チャンネル数はなんと57チャンネル。その9割はロシアからの放送でロシア語、ラトヴィアのテレビ局は7つしかありませんが大方それにはロシア語の字幕が付いています。時々他国の放送も入りますが、ロシア語吹き替えだったりときに「ロシア人向け」で、果たしてこの街に住むロシア人はどれくらいラトヴィア語を分かっているのだろうかと考えました。ゲストハウスのオーナーの人もラトヴィア語を「外国語」として知っているようなくらいでしたので、ラトヴィアが持つ一面性についてこれほど深く感じることはありませんでした。民族とは何か、そして国とは何でしょうか? 国境とは、EUとは、地域とは一体何なのでしょう? 私がこの街を歩いていた時、人々は必ず振り返り、猫はじっと見つめ、犬は絶えず吠えました。アジア人がいるということももちろん驚くべきことですが、まず「自分たち」以外の人がこの街にいることが珍しいことなのでしょう。英語もほとんど通じず、人々もお構いなしにロシア語で話しかけてきますが、そんな人々に接していると彼らの感情表現の豊かさや穏やかさを何よりも感じました。民族が混在していかないほど治安も穏やかに感じる傾向はありますので、ラトヴィアにとっては皮肉かもしれませんが、まさにダウガウビルスはそうなのかもしれません。リーガでは正直なところ、人々の警戒心をよく感じますが、ここダウガウビルスではそういった空気もなく、どこか開放的で人々の温かさを覚えます。そして驚いたことに、洗濯物が外干ししてある! 洗濯物を外に干すことは盗まれる可能性もありますので欧米では全く見たことがない光景だったのですが、ひょっとするとそんな所からも、この街の性質を物語っているのかもしれません。スーパーに入ってみると、さすがポーランドに近いこともあってポーランドからの輸入物や、ロシア音楽のCDも多く売られていました。また暑い街中ではどの都市でも専らアイスクリームが売られているものですが、ここではビール。さすがロシアですね(笑)。また、これがロシアの一面になるの分かりませんが、自販機でコーヒを注いだところ、どさっという音と共に大量の砂糖が落ちてきました! 機械の調子が悪かったのか、それともロシア式コーヒの飲み方なのか、このダウガウビルスにいて多くラトヴィアの一面性に触れることが出来たと感じています。民族とは、そしてラトヴィアという国においてどうなっていくのか、祭典のことも考えながら私はレーゼクネへと向かいました。??? ラトガレ(東ラトヴィア地方)の心、レーゼクネ? そう呼ばれる都市に降り立った時、ダウガウビルスと対照的にも思えてくる雰囲気を感じました。「緑と水にあふれた街」と形容されますが、まさにその通り。夏の光が柔らかく感じられるほどの穏やかな緑でいっぱいでした。実際に私が滞在したホテルの目の前には湖があり、昼間は人々の水浴び場になるのですが、早朝に散歩した時、霧と光を混ぜたこの美しい水辺にため息がこぼれました。自然の豊かさを身近に感じられる、素敵な都市です。ダウガウビルスとは異なり、観光に力を入れているからか、通りや見どころを示す看板が多くありました。「ラトヴィアの統一のために」と掲げられた聖母マリアを思わせる女性の像が街の中心にあり、レーゼクネやラトガレの歴史などが書かれた看板やガイドブックも置かれ、ラトガレの陶器文化を示す事柄が多くありました。この都市ではラトヴィア人とロシア人が半々くらいなので、時々ラトヴィア語も聞こえてきて少し安心しました。ただ半々くらいとなると、余計に戸惑うもの。ロシア語で話した方がいいのか、ラトヴィア語で話した方がいいのか…この都市では観光化の流れからか、英語も少し通用するようになっていましたが、極力現地語で話したい私としてはなかなか悩みの種でした。スーパーで買い物しようとしてもどちらの方がよいだろうか、違う方で話したら失礼だろうか躊躇したものの、周囲の会話を聞きながら慎重に話しかけることを選びました。ラトガレ文化歴史博物館へ行ったのですが、若い女性にラトヴィア語で話しかけたところ、にっこり笑ってくれました。「日本でラトヴィア語を勉強しています」ということと博物館の感想を、置いてあったゲストブックにラトヴィア語で書いておきました。また本屋へ行った際にラトヴィア語テキストを購入したのですが、それを見て店員さんの表情が柔らかくなり、いつまでも私を見送ってくれたこともありました。観光客は多くなったものの、やはりこの街でもまだまだ「外国人」は珍しいようですが、ロシア語よりラトヴィア語が分かる人となると嬉しいようです。この点でも同じ東ラトヴィアでも違いがあることに気付かされました。? ラトガレにはラトガレ語という一種の方言があり、またその話者はラトガレ人としての意識があるといえます。ラトガレ人はラトヴィア人の一員である意識から、ひょっとするとロシア人と対するものがあるかもしれません。しかしながらおそらく、私が躊躇するほど言語の問題をレーゼクネに住む人々はあまり露わにしているように感じます。ただ彼らが日常接する時どのように感じているのかは定かではありませんが……。ダウガウビルスと異なった雰囲気を持つのは地理的環境ばかりではなく、民族構成も大きく影響していると思います。内陸で国境に近いからこそ容易にはいれない民族問題ですが、例えば言語の面でどううまく彼らがつきあっているのか、日本人である我々からすると少し想像しにくいかもしれません。ではアイデンティティは? このことについては様々な意見があるかと思いますが、再独立してから20年近く経つ今、もうこのことを際立てる必要性は以前より薄れてきたのかもしれません。?? ダウガウビルスとレーゼクネ。どちらも同じ東ラトヴィアですが、似ているように見えて実は対照的な都市であるように思います。レーゼクネではラトヴィアとしての意識が高く、文化や都市のアピールをしているように見えたが、ダウガウビルスでは穏やかな生活環境といった要素が強いように感じられました。タイトルに挙げた「Esiet sveicin?ti Latgol? !”(ラトガレへようこそ)、これはレーゼクネでもらったパンフレットに書いてあったフレーズでしたが、果たしてこう言う人はこの東ラトヴィアにどれくらいいるのでしょうか。まずこの言葉を言うことにあたってラトヴィア語か、ラトガレ語か、ロシア語か。本当に「ようこそ」と言えるほど、人々が他の人々を受け入れるための心の準備が出来ているのでしょうか。私には、この言葉にラトガレとラトヴィアという国自体の多面性が見え隠れしているのではと、非常に興味深く感じられます。きつとこれから何度もこの地に私は足を運ぶことになるでしょう、ラトヴィア語で「こんにちは」である「Labdien !”と、言いながらロシア語で「こんにちは」にあたる「Latvija!”を笑って加える、そんな日常に我々は生きることにおいて何か大切な部分を見いだせるのではないかと考えながら?。



? 写真? 正教会?



? 写真? 貨物駅?



?? 写真?レーゼネク公園? ?? ?







???? 写真?レーゼネクの像????



???? 写真?ダウガビルス要塞1?????



??? 写真?ダウガピルス要塞2??? ?



??? 写真?ダウガピルスの通り1???



?? 写真?ダウガピルスの通り??